

京都大学こころの未来研究センター

カール・ベツカー教授

一般財団法人MOA健康科学センター

鈴木清志 理事長

# スピリチュアルに 生きる意味

日本は、高度な医療と衛生環境、十分な食料などに支えられて、世界有数の長寿国となった。だが、果たしてどれだけの人が健康長寿を満喫し、生きがいを感じて毎日を過ごしているだろうか。

毎年行われる「これからの医療とまちづくりシンポジウム」は、今年は10月15日（土）に金沢市の「本多の森ホール」で開催される。スピリチュアリティの研究で有名な京都大学のカール・ベツカー教授にご講演いただく予定だが、今回はそれに先立って、スピリチュアルに生きる意味などについて伺った。



**鈴木** ベッカー先生には、今年の秋に金沢で行われる「これからの医療とまちづくりシンポジウム」で講演いただく予定ですが、今日はそれに先立って、日本人のスピリチュアリティについて、そしてスピリチュアルな生き方と今後の医療やまちづくりについて、先生のお考えをお聞かせください。

**ベッカー** 興味深いテーマです。よろしく願います。

**鈴木** 最初に、日本人のスピリチュアリティについて、先生はどのようにお考えですか。

**ベッカー** 昔の日本では、僧侶はさまざまな知識を持っており、医師の役目も果たしていました。薬草や鍼灸などを用いて多くの人々を治していたのです。他界された場合は、その僧侶が自ら葬儀を取り仕切り、初七日、四十九日、初盆、命日などの形で遺族の心のケアを担いました。この生死を超えた一連の治療とケアが、日本人のスピチュアリティの基礎にあると思います。

ですから、多くの日本人にとって、生と死は連続的なものです。目には見えなくとも、死者のスピリッツ(御

霊、魂)はすぐ近くにおいて、自分を見守ってくれていると感じられます。

**鈴木** それは欧米人の考えとは異なるのですか？

**ベッカー** 実は、日本人のこの考えを西洋に紹介したのは、私の先輩であるシカゴ大学のデニス・クラス(宗教学者、心理学者)です。クラスは、約30年前に来日し、日本の家庭を訪問する中で、仏壇に目を留めました。仏壇との向き合い方や先祖との交流の仕方などを聞き、それを「Continuing Bonds」(「コンティニューイング・ボンズ」、持続する絆)として欧米に紹介しました。日本人にとって、他界した両親や先祖などは自分の日常生活の中で生きており、先祖が近くで見守っているとさえ思えば死は怖くないと思える。こういう思想は、一神教徒にとって新鮮な発見でしたが、欧米人は死別しても、多少なりとも感じられるものです。

**鈴木** なるほど。

**ベッカー** さらに日本人は、自分たちの先祖だけでなく、山川草木に至るまで、自然界の全てに魂が宿っていると考えるのです。非常に敏感な

感覚、美意識だと思います。

別の観点からすると、日本人のスピチュアリティは「何をするか」ではなくて「どうするか」を大切にします。例えばこのケーキのイチ「も、飾り方までちゃんと考えられています。それをありがたく味わいながらいただく。そこに命あることへの感謝や、生きる喜びが生まれてきます。世界中の人がお茶を飲みますが、日本人はその行為をスピリチュアルな茶道にまで確立してきました。華道や書道も同じです。つまり日本では、どういう心(スピリット)で物事を行うかが重要なのです。

### 今、注目が集まる 目に見えないエネルギー

**鈴木** それは、大自然と自分との目に見えない絆を大切にしている思いから来るのかもしれないですね。

**ベッカー** そうですね。これまで、キュリー夫妻やレントゲン、マルコニーなどが、エックス線やラジオ波など、目には見えないけれど科学的には証明できるエネルギーを使って、私たちの生活や医療を良くして